

やがて野山の草木が一面に色づき、一葉二葉と散って行く秋がくる頃お花さん達の焼畑にはびっくりするほどの薯が実りました。

そんなある日の事、お代官様が開拓の様子を見に里を訪れて、お花さんの家が昼食の宿にきめられました。

お花さんは、かいがいしく襷をかけ、へっつい（飯をたくかまど）で御飯をたきあげ、やがてたきあがった御飯をへらでかきまぜながらおひつに移しはじめました。

とたんになんという神様のいたずらでしょう。ブウツ、と時ならぬおならの音がお花さんのお尻から飛び出して終わりました。

アアッ！ 蒼くなり赤くなったお花さんは、つと立ち上るなり家を飛び出して終わりました。突然の出来事に一座の人々はあわておどろきました。お代官様は何も知らないふりをしておとがめ一ツありませんでした。

人々は手をわけてほうぼうたずねまわりましたが、お花さんの消息はさっぱりわかりません。やがて再び春が去り、夏が行き、実りの秋が来て、お花さんが姿を消してからやがて一年目の日が訪れました。

その日家の人たちは、裏山の萩の花がひっそりと咲きほこった根元に、襷をかけた姿のまゝで